

## 日本の歴史 12

### 毛利和雄著『高松塚古墳は守れるか：保存科学の挑戦』

(NHKブックス 日本放送出版協会 2007年)

稲垣 宏行

奈良県の明日香村にある高松塚古墳壁画の保存の方法を巡って、地元住民やマスコミ関係者の間から多くの批判が飛び交いました。「以前から壁画の保存方法について、文化庁の側に大きな問題があった」そして、「まず壁画のはぎ取りや石室の解体ありきというのはおかしい」というのが主なものです。しかし、それらの批判は果たして的を射たものなのでしょうか。本書はそうした疑問を私たちにに対して問いかけています。

高松塚古墳は1972年頃、末永雅雄氏ら研究者・学者グループによって最初に発掘されました。著者はそれ以降の保存作業が、カビなどによる壁画の劣化との闘いであったと述べています。そこには外部から人がむやみに石室内に入っただけでも、カビが繁殖する原因になり、入る前には必ず殺菌する必要があること、また、大雨によっても石室内の湿度が上昇し、カビが繁殖する要因となるとしています。中でも最も危険なのは、地震によって壁画に亀裂が生じるという可能性で、亀裂は壁画の価値を損ねるだけでなく、虫や雨水がそこから入り込む原因となり、壁画の劣化に拍車をかけることが書かれています。そのうえ、石室内は室温が上がり易く、人の出入りによっても上昇するという問題点を指摘し、室温を常に一定に保つことを条件としています。このようなことから、高松塚古墳が作られてから、遺物を狙う盗掘者たちによって侵入されていたという経緯も劣化が進行する要因になったことも著者は推測しています。

著者が述べるように、壁画の保存作業は神経を使います。しかし、私たちもマスコミもそのことに関して無頓着とも取れる面が本書から伺えます。地元の住民たちは自分たちの文化財を守りたいという思いから、石室の解体に反対していました。マスコミも「永久保存」の考えから難色を示す主張を唱えてきました。これに対し著者は「永久保存は不可能」という判断を下しています。また文化庁のせいぜい壁画の劣化

を遅らせるくらいしか出来ないという考えも付け加えています。

高松塚古墳の壁画に限らず、年代の重みを感じさせる遺跡や遺物は私たちにとってかけがえない物であり、そのままの形で永遠に残していきたいと考えるのは当然の心理と言えます。ただ、理想と現実とは別のものです。壁画をそのままの形でいつまでも残していくことは、前述の問題からしてもやはり難しいのではないかと

思います。保存科学の向上も望まれますが、壁画や古墳を維持していくには、解体もやむなしとする心の広さも必要なのではないでしょうか。確かに、カビ対策に対する認識の甘さや情報公開の不徹底などの不手際も、壁画の劣化が進む一因になったのは事実ですが、本書にも記されているように、地理的な要因に加え地震などに見舞われる中で古墳自体の構造などいくつもの要因が関わっていると考えられます。

また本書では、高松塚古墳と類似した世界の例がいくつか紹介されています。その一つが精巧な壁画で知られるフランスのラスコー洞窟です。この洞窟壁画も1963年頃からカビによる劣化に悩まされていると言われています。技術立国を任ずる日本としては、多くの

科学を基盤にしてカビの発生原因となる外的環境に対応できる保存科学を確立する必要があります。それによって「永久保存」が可能にならないまでも、壁画の姿をある程度守り続けることは、その壁画を描いた7世紀の人たちとの絆を確認することにも繋がることだと考えられます。

こうした議論の中で、高松塚古墳は8月21日に解体されました。その後も、現状の保存技術で壁画を維持できるよう努力が行われています。高松塚壁画の保存は日本の一地域の問題ではなく、全世界共通の保存科学における命題と言っても過言ではないでしょう。

いながき ひろゆき (係・情報サービス課)

### 技術立国日本ならではの保存技術の確立を